

北海道支部の魅力

板橋 豊

松永勝彦先生（北大名誉教授）のお薦めで日本分析化学会に入会させていただいたのが1999年ですので、私の会員歴は北海道支部の歴史の7分の1に過ぎません。しかし、20年、30年と会員を続けている他のどの学会よりも分析化学会、とりわけ北海道支部に居心地の良さを感じています。支部会員数が300人に満たない小規模集団であることが、まとまりのある一体感を作っているのかもしれませんが、それよりも専門分野や年齢を超えて相手を気軽に受け入れる支部会員個々の魅力ある人柄が互いを惹きつけているように思われます。このことは、産官学の人たちが、飲食寝をともにしながら膝を交えて気楽に語り合う「氷雪セミナー」に端的に現れているように思います。先輩諸氏が築き上げた伝統と言ってよいでしょう。昨年、支部長の大役を仰せつかりましたが、支部会員の今はほとんどいない函館に支部長を置くことを決めた支部幹事諸氏の英断（？）と言うか、何とかなるだろうという大らかさをここにもみることができそうです。幸い支部長の仕事は会員諸兄の激励とご協力で何とか無事終えることができましたが、その1年は慌てたり安堵したりの繰り返しだったように思います。その中で、北見で開催した第66回分析化学討論会には特別の想いがあります（「ぶんせき」2005年11号、p.644）。北見工大の数名を中心に実行委員が一体となって開催にこぎつけ、盛会裏に終えたことはたいへん感慨深く、北海道支部の底力をみた気がしました。また、7月には函館で支部の共催事業である夏季研究発表会が開かれ、小生が実行委員長を務めたのですが、夏季研としては過去最多の約160件の研究発表が行われ、多くの方に参加していただいたことはたいへん嬉しいことでした。

私は分析化学を駆使して脂質の構造と機能に関する研究を行っています。ある成分を分析する場合、たとえ決まった一定の方法があるにしても、できるだけ新しい方法を開発して分析することを心がけてきました。新しい方法を使えば新しいことが見えてくるという考えからです（勿論、そうならずにながかりすることの方が圧倒的に多いのですが）。そうした悪癖から、上述の夏季研でも従来とは違ったやり方を取り入れてしまいました。会場の選択、液晶プロジェクターの使用、中高校生による研究発表、大学案内そして休み時間に音楽演奏などがそうでした。特別意識して行ったわけではありませんでしたので、良い研究発表会であったと後でお褒めの言葉（「化学と工業」2006年1号、p.32）を頂戴したのは望外の喜びでした。「従来通り」に行うと煩わしさと疲労感だけが残るように思います。しかし、そこに何か1つ新しいことを取り入れると小さいながらも達成感と人との新たな出会いが生まれる楽しさがあります（実際、このとき一緒に働いた非会員が、その後分析化学会に入会してくれました）。どうせやるなら後者の方をこれからも選びたいと思っています。

昨年、「ぶんせき」編集委員会から「とびら」への執筆依頼がありましたので、「支部長雑感」と題して以下のような雑文を送りました（「ぶんせき」2006年3号、p.101）。支部活動の宣伝と支部の魅力について、ちょっと記したものです。

「支部長を仰せつかって以前はあまり意識しなかった支部の台所や会員数、支部事業に

ついてよく考えるようになった。インターネットを介して情報が容易に手に入り、イベントものが多すぎるほどの現在、学会が資金（会員）を増やして事業をどんどんやるのが健全かどうかについては意見が分かれるかもしれないが、会員同士が直接会って議論することの大切さはいつの時代においても変りはないであろう。

（略）

北海道支部では毎年以下の事業を実施して会員に自らを高める機会と親睦を深める場を提供している。

（略）

支部では、この他に年 2 回「北海道支部ニュース」を刊行して支部会員間の情報交換に資している。昨年 7 月に第 31 号を発行したが、その巻頭言で私は「会員であることの実感を」と題して「学会は会費を納めているすべての会員のためにある。会員はどうか、支部が主催または共催するこれらの行事に参加して、会員であることに実感を持っていただきたい。真摯さと温かさに裏打された支部の魅力を必ずや感じていただけると信じる。日々の仕事や勉強に日本分析化学会北海道支部を積極的に利用して欲しい」と呼びかけた。それは、全ての会員が単に会費を払うだけでなく、支部や本部が主催する事業のどれか 1 つにでも毎年参加して、会員であることに実感をもって初めて魅力ある学会になり、周囲の方々にも自信をもって入会を勧められると思っているからである。

（略）

最大の会員数を誇る関東支部は昨年創立 50 周年を迎えた。慶賀の至りである。そして最小の北海道支部は今年その記念すべき節目を迎える。金太郎飴ではない各支部独自の特徴を生かした活動が総じて日本分析化学会の更なる健全な発展に繋がるものと信じたい。分析化学は科学の多くの分野が必要とする学問である。会員に異分野における分析化学やそれに携わる人たちを受け入れる大らかさがある限り、日本分析化学会の未来は明るいと思っている」。

最後になりましたが、北海道支部設立 50 周年を迎えるにあたり、支部設立に尽力され、その後今日までの歴史を築いてこられた先輩諸氏に深い敬意を表し、北海道支部が魅力溢れる支部として今後一層発展することを祈念いたします。

（北海道大学大学院水産科学研究所）